

SPRING CONCERT

～多彩なメロディーを桜舞う風に乗せて～



*Monsieur Sadi dans la maison
il songe*

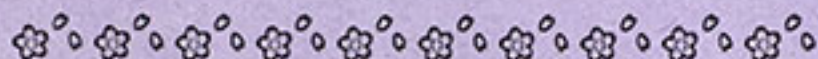
平成31年 4月30日 (火・祝)

14:00開演

於 石のむろじ

Program

- F. J. ハイドン ディヴェルティメント『先生と生徒』 Hob.XVIIa:1
F. J. Haydn Divertimento 'Il maestro e lo scolare' Hob.XVIIa:1
- J. ブラームス 16のワルツ Op.39
J. Brahms 16 Walzer Op.39
- J. シュトラウス2世 美しく青きドナウ Op.314
J. Strauss II An der schönen, blauen Donau Op.314



- F. プーランク 四手のためのピアノ・ソナタ FP.8
F. Poulenc Sonate pour piano 4 mains FP.8
 第1楽章 前奏曲 Prelude
 第2楽章 田舎風の Rustique
 第3楽章 終曲 Final
- C. ドビュッシー 小組曲
C. Debussy Petite suite
 1. 小舟にて En Bateau
 2. 行列 Cortège
 3. メヌエット Menuet
 4. バレエ Ballet
- E. サティ 風変わりな美女 - 四手のための真面目な幻想曲
E. Satie La Belle Excentrique, Fantaisie sérieuse à 4 mains
 1. 大きなリトルネッロ Grande ritournelle
 2. 《フランス・月世界》行進曲 Marche Franco-Lunaire
 3. 《眼へ神秘的なキス》のワルツ
 Valse de "Mysterieux Baiser dans l'Oeil"
 4. 《大社交家》のカンカン Cancan Grand-Mondain

Program Note

- ◆ フランツ・ヨーゼフ・ハイドン(1732~1809)はオーストリアの作曲家で、ウィーンを舞台に長く音楽活動を行なった。音楽家の家系ではなかったが幼い頃から音楽の才能を発揮し、数多くの作品を残した。『先生と生徒』は、第1楽章は変奏曲のスタイルをとり、セコンド(先生)の弾くフレーズをプリモ(生徒)が反復するという、そのタイトル通りの特徴的な書法で構成されている。第2楽章は快活なメヌエットで、プリモとセコンドが心地の良いハーモニーを奏でる。
- ◆ ドイツに生まれオーストリアで亡くなったヨハネス・ブラームス(1833~1897)は、ロマン派の作曲家の中で最も古典派に近いと考えられており、「新古典派」と呼ばれることもある。ハイドンを敬愛し、ヨハン・シュトラウス2世とも親交があった。『16のワルツ』を作曲した当時、ウィーンではシュトラウス2世がワルツ王として全盛をきわめており、ワルツは完全に娯楽的な音楽と考えられていた。絶対音楽の推進者とされていた気難し屋のブラームスが家庭的で気楽なワルツを作曲したことは、大きな驚きをもって受け止められた。
- ◆ ヨハン・シュトラウス2世(1825~1899)はオーストリア・ウィーンを中心に活躍し、生涯のほとんどをウィンナー・ワルツ、ポルカなどの作曲に捧げた。『美しく青きドナウ』は彼の代名詞とも言える有名作品である。親友であったブラームスは、この曲が大のお気に入りだった。今回はハンガリーのピアニスト、ヤーノシュ・ツェグレディ氏による編曲で演奏する。
- ◆ 今年生誕120周年を迎えるフランシス・プーランク(1899~1963)は、サティやドビュッシーの少し後に活躍したフランスの作曲家である。彼が作る曲は軽快でユーモアとアイロニーと知性があり、「エスプリの作曲家」とも呼ばれる。大胆で鮮やかな複調の響きを特に好んで取り込み、旋律同士や和音同士をその手法によって重ねることが多く見られる。『四手のためのピアノ・ソナタ』は3楽章構成で、第1楽章はリズムカルな和音連打と、穏やかな中間部との対比が特徴的。第2楽章は、シンプルな旋律の繰り返りで構成される。第3楽章では、冒頭のテーマと第1、第2楽章の旋律が駆け回るように登場する。
- ◆ 2018年に没後100周年を迎えたクロード・ドビュッシー(1862~1918)は、豊かな色彩の表現を追求し20世紀の扉を開いた、近代フランス音楽の代表的作曲家である。音楽家としてのエリート街道を進む反面、まだ売れていなかった時代のサティとも親交を深めていた。『小組曲』は初期の作品で、まだ伝統的な作曲技法の枠からは抜け出していないものの、随所に革新への第一歩を感じ取ることができる。4曲すべてにおいて、主部と対照的な中間部を持つ三部形式(A-B-A'-Coda)で書かれている。

◆『ジムノペディ』『ジュ・トゥ・ヴ』などで有名なエリック・サティ(1866~1925)は、ドビュッシーを始め多くの作曲家たちに影響を与えた人物だが、実は「稀代の変わり者」と呼ばれるほどの異端児であった。パリ音楽院を早々に退学し酒場のピアノ弾きをしていたサティの音楽は、数多の作曲家たちが研鑽を積んできた形式や理論に捉われない新鮮な魅力に溢れている。『風変わりな美女』は、もとはミュージック・ホールのダンサーの依頼で書かれた管弦楽曲で、後にサティ自身によってピアノ連弾用に編曲されたものである。

このプログラムの表紙の絵は、サティから詩人ジャン・コクトーに宛てた書簡に描かれた「サティ氏、自宅にてもの思いに耽る」の素描であることも併せて紹介したい。

Performer Profile

ピアノデュオ Tigrigio (ティグリージョ)

イタリア国立サンタ・チェチーリア音楽院在学中に結成。Emufest国際現代音楽フェスティバルでは2台ピアノと電子機器による前衛音楽を演奏し、好評を博した。帰国後はそれぞれのソロ活動の傍ら、クラシック音楽を中心にレパートリーの幅を広げ、息の合った演奏を披露している。デュオ名は、2匹の飼い猫の柄に由来している。

▶堀内 瑞恵 (ほりうち みずえ)

武蔵野音楽大学附属高校を経て、同大学音楽学部器楽学科ピアノ専攻を卒業。イタリア国立サンタ・チェチーリア音楽院及び上級特修課程を最優秀の成績で修了。フランスでは、現地オーケストラとベートーヴェンのピアノ協奏曲第5番『皇帝』を共演した。第3回ジュゼッペ・テッラッチャーノ国際ピアノコンクールにて第3位、マデージモ国際ピアノコンクールにて奨励賞を受賞。これまでに、ピアノを黒川浩、浜川湖、伊東京子、B.フォシェ、G.ランニ、M.モウケの各氏に師事。

現在、聖徳大学および同大学幼児教育専門学校兼任講師。

▶堀内 亮 (ほりうち りょう)

武蔵野音楽大学卒業、同大学院修了。イタリア国立サンタ・チェチーリア音楽院に留学し、同音楽院及び上級特修課程の卒業試験に於いて最高得点を修め卒業した。在学中多くの国際ピアノコンクールにて第1位受賞を果たしているが、2011年フランスでのメリニャック国際コンクールで第1位を受賞したのを皮切りにヨーロッパに於ける演奏活動の場を広げた。ソリストとしてイタリアやフランスを中心にさまざまな音楽祭に出演。アブルッツォ交響楽団及びサンタ・チェチーリア学生オーケストラとベートーヴェンのピアノ協奏曲第4番を、また、カンバーニャ交響楽団とリストのピアノ協奏曲第1番を共演し好評を得た。これまでに坂井玲子、M.モウケ、B.フォシェ、A.ナセトキン、L.ナウモフ、G.ムニエ、B.ベルマン、F.ニコロージ、B.リグット、A.チッコリーニ、K.ゲキチの各氏に師事。

現在、武蔵野音楽大学および同大学附属音楽教室非常勤講師。